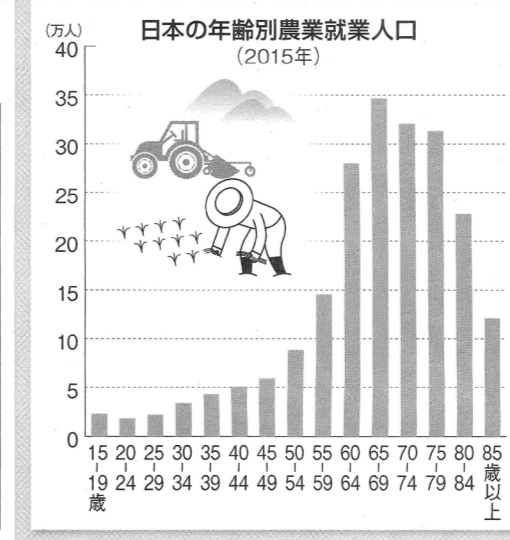
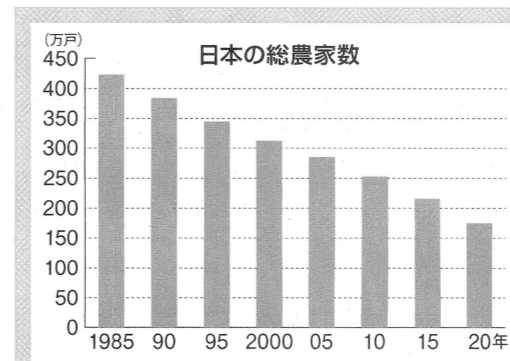


産業 TREND

気候変動は漁業だけではなく農業にも影響を与えている。さらに、人材不足の問題にも直面している。本稿では気候変動の農業に与える影響や農業の現場で試行錯誤し、取り組まれている課題について考えたい。

地域の「農力」を次代に



気候変動下の食料生産

漁業の現場は温暖化による海水温の上昇で、魚種が変わり、漁獲量が減少し、磯焼けが広がっている。これまでに、寄稿で紹介してきたように、今まで捕れていた魚が捕れなくなり、この5年程度で漁場が激変している。それでは陸域はどのような気候変動の影響を受けているのだろうか。

気候変動の農業への影響を概観したい。農林水産省の2021年の地球温暖化影響調査レポートによれば、日本の平均気温偏差は約0.61度以降、3番目に高い値となった。日本の年平均気温は長期的には100年当たり1.28度Cの割合で上昇している。発生報告の多い農畜産物における影響を見ると、水稲では出穂期以降の高温による白米熟粒が多く都道府県で発生し、暖冬による虫害が多発した。果樹については果実肥大時期以降の高温による着色不良・着色遅延、日焼け果などが

未利用資源を活用する 美食地政学

パート2 ▶7



海女が使用していた浮きを店の銅鑪に。たたくと懐かしい木の音が鳴る

発生した。野菜については、収穫期の高温による着果不良や不良果が発生し、また病害や虫害が発生した。高温の影響が出ています。

◎ ◎ ◎

一方、農林業センサスによ

自然と共存 志摩でサトウキビ

と、日本の総農家数は1961年の約600万戸から減少傾向になり、2020年に174万7000戸まで減少した。年間約8万戸減少しているのだ。40年には農家が消えてなくなるスピードである。年齢別農業就業人口を見ると60歳から84歳までの年齢層が主となっている（15年）。農業従事者の高齢化や後継者不足が喫緊の課題である。そして、日本には耕作放棄地が約21万8000ha存在する（同）。未利用な土地の問題や気候変動の問題に加え、人材の問題が深刻である。止まる気配がない。農業従事者数を減らしているため、このまま何も手を打たなければ農家の激減が予想される。

かつては、親の仕事を経るのは常識だった。今は継がなくなってきた。親が子どもに対して都市部で就職することを勧め、継ぐことを勧めないからだ。農家が減少するの当然である。日本の農業を増やす



西村氏は仕事場の側のスペースを日曜大工（DIY）でカフェに作り変え、シークワサー、パイア、バナナ、パッションフルーツなどを植え、沖縄のような空間を手作りしている。皆が集える場所を作るためだという。かつてその地域に多くいた海女が使用していた浮きをお店の銅鑪にたたくと懐かしい木の音が鳴ると言及している。ポンと音が鳴る。子どもたちに農業に関心を示してもらおうための空間がゆつくりと作られていく。自分も楽しんでる。

◎ ◎ ◎

未来の農業を支える人材を



ふるかわ、りゅうぞう 72年（昭47）東京都生まれ。博士（学術）。東京都市大学環境学部環境経営システム学科学科教授。専門は環境イノベーション。戦前の暮らし方、自然に学ぶものづくり、ライフスタイル変革の研究や地方・都市連携プロジェクトを行う。

と、よこやま取締役兼南勢志摩さとうきび振興企業組合理事長の西村昌人氏は、伊勢志摩地域でサトウキビを生産している。そして、環境に負荷をかけるだけ与えない農業を心がけ、サトウキビの未利用資源を利用したバガス農業を開始し、新しい取り組みに挑戦している。最近では、地域の子どもたちへの教育に力を入れている。



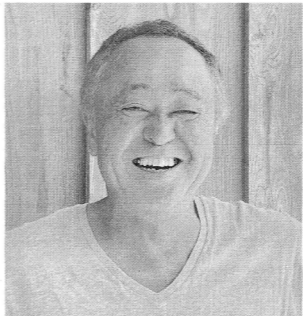
「この地には後世に残していけるものがあります。サトウキビをこの地で生産すること、これは残していけると思っています。これがこの地域の期待です。この地の地場産業にしていきたいと思っています。地球に負荷がかからないものを生産する、育つものを育つ場所で育てることなのです。この地域にはサトウキビに興味を持ってくれる人がいます。後はきっかけをいかにして与えるかということだと思います」（聞き手・古川教授）

知恵伝承、コミュニティー守る

戦前の持続可能な暮らし方を分析すると、7つの共通要素が抽出される。「自然を生かされている」「循環」「伝承」「役割」「共有」「成長」である。この「伝承」を継いでしまえば、蓄積した知恵が途絶えてしまう。一度途絶えてしまえば、復活するのは余計にエネルギーが必要になる。自給自足に近い暮らしは伝承の重要性が増す。暮らしには欠かせない食に関して知恵の伝承が最も重要だ。

ある村で、昔楽しんでいた祭りがほとんど行われなくなっているという話があった。コロナ禍の影響を受けて、今誰かが動かなければ、本当に消えてしまってしまうのだ。一度消えてしまえば、それを立ち上げるのは大変だ。日本のさまざまな産業や地域は存続の瀬戸際にいる。文化が消え、伝統芸能が消え、技術が消え、コミュニティーが消えている。日本に住む人々が食を生産することに心がなくなり、食の生産技術を伝承しなくなれば持続可能な社会の構築はできない。食の生産者の価値観の転換が求められる。

よこやま取締役 西村 昌人氏 南勢志摩さとうきび振興企業組合理事長



「バガスや海藻、耕作放棄地の桑も活用」

を利用する、という考え方は大事なことだと思っています」

「最近の農業における課題は。農業の衰退は早いと思います。若者は農業の生産物が安いとやりたくないと思っています。農業では生産物に付加価値を乗せていく必要があります。多くの人は田舎には仕事がないと言いますが、仕事はあるのですが、若者がやりたい仕事がないのです。親の世代は子どもたちに対して都会に住めと勧めます。それは企業戦士を育てているだけです。逆に、その地域に入ってくるのは高齢者が多く、地

域に貢献せずに文句ばかり言う人が多いです。自分で考えて行動することが農業では求められていますが、誰かの指示を待っていることが多いようです。成功例を見ると輝かしいですが、成功するのは一握りであり、成功に対して努力する人が少なくなっていると感じます」

「この地域への期待は。この地には後世に残していけるものがあります。サトウキビをこの地で生産すること、これは残していけると思っています。これがこの地域の期待です。この地の地場産業にしていきたいと思っています。地球に負荷がかからないものを生産する、育つものを育つ場所で育てることなのです。この地域にはサトウキビに興味を持ってくれる人がいます。後はきっかけをいかにして与えるかということだと思います」（聞き手・古川教授）

低環境負荷、就農の魅力に